

域中間圏における重力波の特性について発表した。また Fetzer and Gille は LIMS を用いた全地球的な長期間衛星観測 (1978年10月~1979年5月) をもとに中層大気中の温度プロファイルの中規模擾乱の鉛直波数スペクトルの解析結果を報告した。これらの大気中の重力波に関する理論的研究や観測結果がいずれ GCM モデル等に組み込まれることで地球大気モデリングが一層精密になることが期待される。

一方、海洋中の重力波について Pinkel と Mormorino が高空間分解能の温度センサーやドップラーソナーを用いた精密な観測について最近の研究成果を総括した。海洋中でも重力波はエネルギーが高い海洋中の中規模擾乱が消散効果が重要となる小規模擾乱に結びつけられる過程で大変重要な役割を果たすとされている。海洋と大気では背景の状態に大きな相違があるものの類似の波動現象が認められる点や、位相合成によってビーム方向を自

在に走査できるドップラーソナーを用いて擾乱の方位角異方性を測定する等中層大気の観測と良く似た研究方法を用いている点が筆者には興味深かった。

最後に筆者の雑感を記すが、重力波といった特定の研究テーマで約40件の講演が行われたことから重力波についての関心の高さと米国の研究者の層の厚さを感じた。ビデオや映画を駆使して研究結果を視覚的に上手に表現した発表が多く、また結論を講演の最後に的確にまとめており、一般に発表方法が洗練されている点が印象的であった反面、講演時間を厳守する人は少なく会議全体の進行は遅れがちであった (あるいは、それを前提として Coffee Break や Lunch Break を大変長く取っている) ことは国内の学会との相違を感じた。

これらの一連の会議に出席し講演をするにあたって財団法人国際コミュニケーション基金から派遣費の援助を頂いたことを感謝する。

日本気象学会誌 気象集誌

第II輯 第67巻 第4号 1989年8月

- 清 忠師・権田武彦：気相から成長する多面体水晶の成長速度と晶癖変化
 石原正仁・榎原 均・柳沢善次：冬の季節風と陸風の間で作られたメソスケール降雪帯の構造についてのドップラーレーダー解析
 佐藤 昇・菊地勝弘：代表的な低温型雪結晶の結晶構造
 山崎正紀：熱帯収束帯における台風の発生の数値実験
 大滝英治・塚本 修・岩谷祥美・光田 寧：海洋上での二酸化炭素フラックスの測定
 篠田雅人：熱帯アフリカ半乾燥地における年降水量変動とその南北半球間の連関：1987年まで更新したデータを用いて
 光本茂記：斜面風に関する室内実験
 岩崎博之・武田喬男：停滞した長寿命クラウド・クラスター内部での積乱雲群の振舞に関する研究
 二階堂義信：全球スペクトルモデル T42 の4月積分に見られる PJ 的な南北振動
 尾瀬智昭・時岡達志・山崎孝治：ハドレー循環と背の高い積雲対流
 井上豊志郎：分割窓領域データから算定された北半球の冬における熱帯太平洋での雲分布の特徴
 二宮洸三：1979年梅雨期東アジアの雲分布
 水間満郎：スペクトル法による海陸風数値モデルの構築

要報と質疑

- 新田 勲：1986-87 エルニーニョ発生期における双子低気圧の発達と西風強化
 斉藤和雄：診断式による雲量のモデル面への割り振り法の比較